

# 寄 生 虫 検 査

## 動 向

平成7年度の学校保健安全法の改正後、ぎょう虫卵検査の対象学年は県下一部地域を除き、小学校1～3年生までとして定着している。今年度は、前年度に比べ、受検学校数は75校減(5.9%)、受検者数は7,501名減(3.0%)となった。ぎょう虫卵陽性者の割合は年々減少し、前年度と同様に1%を下回り、0.09%となった。同様に寄生虫(ぎょう虫)ゼロの学校の割合も全体で92.4%となり、ぎょう虫卵検査の本来の目的を達成しつつある。当協会ではぎょう虫卵検査に限らず学校保健分野の検診、検査において従来の形を踏襲するだけではなく、学校現場の要望に答え、行政、医師会等と連携を保ち、社会の変化に対応できる検査態勢を今後も進めていく。

## 方 法

### ぎょう虫検査

人体内では産卵せず肛門周囲に出てきて産卵するぎょう虫は、通常の糞便塗抹検査では検出できない。当施設ではウスイ式セロハンテープによる二日連続採卵法で検査を行い、肛門周囲に産卵されたぎょう虫卵を検出している。この検査はセロハンテープを肛門周囲に当ててぎょう虫卵を貼り付けるという原理で、かつぎょう虫が毎日産卵するとは限らないので2日間連続して採卵するというものである。

検査を受けるにあたっては朝起きてすぐに、検査紙を肛門周囲にあてる。排便後では肛門周囲が拭き取られるために検出率が極端に低下するので注意が必要である。

### 精度管理

顕微鏡検査による見落としを防ぐため一度検査したものを再検査するとともに、毎日の陽性率をチェックし大きな変動がないかを確認している。

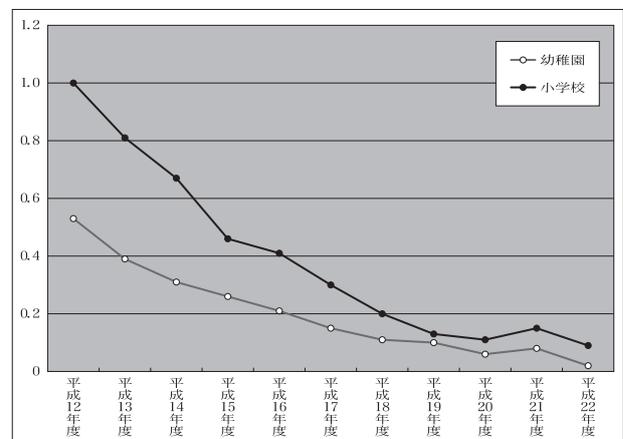
## 結 果

表3に22年度の幼稚園・小学校の市町村別ぎょう虫検査成績を示した。小学校での受検者は167,653名で陽性者(保卵者)は146名、陽性率は0.09%だった。21年度の陽性率0.15%に対して0.06%減少した。陽性率の比較的高かった主な地区は座間市0.25%、鎌倉市0.62%などであった。この傾向は前年度と同じであるが両市の陽性率は前年より減少している。

幼稚園の受検者は73,331名、陽性者(保卵者)は14名、陽性率は0.02%だった。21度の0.08%に対して0.06%減少した。このうち公立幼稚園の陽性率は0.01%、私立幼稚園も0.02%であった。

過去10年間のぎょう虫陽性率の年次推移を図に示した。当施設で実施している小学生の陽性率を(●)で、幼稚園児の陽性率を(○)で示した。陽性率全般の推移をみると平成12年度から19年度までは毎年ほぼ一定の割合で減少し続けていたが、20年度では減少傾向がとまり、21年度はわずかに上昇に転じているように見えたが22年度は再び減少した。小学生について見ると、平成12年度の陽性率1.0%から13年度には0.81%となり15年度には0.5%を切った。その後は緩慢な減少傾向となるが平成15年度の陽性率0.46%から19年度の0.13%へ4年間で0.33%減少している。但し18～20年度は横浜市が他検査機関で実施しているため横浜市の状況は反映されていないが、小学生全体の傾向はここ数年変わっていない。また、幼稚園の陽性率は平成12年度の0.53%から徐々に減り続け19年度に0.1%となり21年度は0.02%まで減少した。

ぎょう虫陽性率の推移を見ると、毎年着実に減少してきた。小学生では平成19年度から毎年0.1%前後で推移しており、幼稚園では20年度に初めて0.1%を切って以降も減少傾向が続いている。これはほぼ終息に近づいていると言える。このままぎょう虫症が終息に向かうのかどうか、今後のぎょう虫卵陽性率の動向が注目される。いずれにしろ確実にぎょう虫症が減少してきたことは明白であり、長年実施してきたぎょう虫検査の効果が実証されつつある。



関係の集計表は163頁に掲載